

## バレーボールにおける選抜チームのチームづくりに関する事例研究

箕輪憲吾<sup>1)</sup>, 松本勇治<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>上尾中央医科グループ

<sup>2)</sup>佐賀女子短期大学

キーワード:バレーボール, 事例研究, チームづくり, 選抜チーム

### [要旨]

平成21年度西日本大学バレーボール5学連選抜男女対抗戦における九州選抜女子チームの優勝までのチームづくりの過程について検討, 考察を行った結果は以下のとおりである。

- 1) 九州選抜の優勝は, チームづくりにおける指導者の方針に対して, 選手が一つにまとまり勝てるチームへと成長したことによる結果であった。
- 2) 短期間の選抜チームのチームづくりには指導者の素早い判断と決断が求められるが, そのためにはそれを支えるスタッフの存在が重要である。
- 3) 短期間の選抜チームのチームづくりにおいて指導者には, 個人の目標をいかにしてチームの目標へと切り替えさせるかが必要である。
- 4) 短期間の選抜チームでは, 指導者が選手を自分の考える「型」にはめるのではなく, 選手同士がコミュニケーションを取ることによってチームづくりに積極的に参加し, 全員でチームとしての「型」をつくって行くという方法もあることが認識された。
- 5) 短期間の選抜チームで指導者が選手に話をする際には「短く, 簡潔な言葉を選ぶ」ことが必要な場合もある。

スポーツパフォーマンス研究, 7, 195-212, 2015年, 受付日:2015年2月24日, 受理日:2015年7月6日

責任著者: 箕輪憲吾 〒362-0075 埼玉県上尾市柏座 1-10-3-58 k.minowa.amg@icloud.com

\*\*\*\*\*

## **Team-building with a university volleyball team selected for a competition: a case study**

Kengo Minowa<sup>1)</sup>, Yuji Matsumoto<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> Ageo Medical Group

<sup>2)</sup> Saga Women's Junior College

Key word: volleyball, case study, team building, selected team

### [Abstract]

The present study reviewed and analyzed the process of team-building with the Kyushu university women's volleyball team that was selected to participate in the 2009 Volleyball Competition of Men's and Women's Teams from Five Universities in Western Japan. The following results were obtained:

- 1) The victory of the Kyushu team resulted from its successful growth into a winning team in which team members followed the coaches' advice and built up firm teamwork.

- 2) For team-building to be successful in a short period of time, quick judgment and decision-making are required. The presence of staff who support the coaches is also important.
- 3) Coaches must guide every member of the team to shift from individual goals to team goals.
- 4) Another way to build a team in a short period of time is to have the coaches not force the team members to agree with the coaches' ideas, but rather to let the team members communicate with each other and actively participate with the coaches in the team-building process. That is how to cooperate to create the team's style.
- 5) Coaches should select short and simple words when speaking to team members

## I 緒言

スポーツに関する事例研究について會田(2014)は「一人のコーチが経験できるコーチング実践には限りがある。実践報告や事例研究は、コーチの実践と省察のための貴重な情報となり、他者のコーチング経験を補ったり、深めたりすることができる。」として、その重要性を指摘している。同様に箕輪(2007)はチームづくりに関する事例研究に関して「よりよいチームづくりの方法論を模索する上で、多くの事例が持つ意味は非常に重要である。」と述べ、その重要性を報告している。しかし、実際には指導者の考えるチームづくりの哲学や方法論はそのチームの重要な内部情報であり、それを公開することにもなる事例研究は、情報の外部流失につながると考えられることがコーチ学における研究としての難しさにつながっていることは事実であろう。これに関して吉田(2005)は、コーチ学の研究の問題点として「秘密」を上げており、「チャンピオンスポーツの場合、勝利の内実はその選手やコーチの中に閉ざされているケースが多い。」と指摘している。

このような中で、これまでにバレーボールのチームづくりに関する事例研究としては、チームの一年間を通じたチームづくりに関する研究(中西, 2002; 今丸, 2010)や、ある大会に向けた期間を対象としたチームづくりに関する研究(吉田, 1993; 箕輪, 2003)などが行われているが、これらはすべて一つの大学チームを対象とした研究である。

このような状況の中で、今回はこれまでに見られない選抜チームのチームづくりの過程についての研究を試みるものである。その対象となるのは、平成 21 年度の第 10 回西日本大学バレーボール選抜 5 学連対抗戦において、優勝は厳しいと考えられていたにも関わらず予選グループ戦、決勝トーナメントを全勝で制した九州選抜女子チームである。ただ、その九州選抜女子チームのチームづくりの期間は大会直前の合宿と大会期間中の約 1 週間であり、一般的にイメージされるチームづくりに要する時間と比較すると極端に短く、事例研究の対象として適しているかどうかは不透明な面もある。しかしながら、極めて特殊な事例にはなるが、短期的な選抜チームに集まったメンバーがチームとして優勝に至るまでのチームづくりに関する過程について検討を行うことは、箕輪(2003)の言う「新たな事例研究に対する試み、および多くの事例に関する研究の必要性」ということに関連して考えると研究としての意義があると思われる。また、短期的な選抜チームの事例についての検討の結果が、一般的にイメージされるチームづくりの方法論につながる可能性も考えられることから、あえて本研究は行うものである。

本研究の目的は、平成 21 年度の第 10 回西日本大学バレーボール選抜 5 学連対抗戦における、九州選抜女子チームのチームづくりの過程と結果に関して検討、考察を行うことによって、今後のバレーボール指導の資料を得ることである。

## II 研究方法

### 1 研究対象

研究対象は、平成 21 年度第 10 回西日本大学バレーボール 5 学連男女選抜対抗戦における九州選抜女子チーム(以下:九州選抜)の選手選考から大会終了までのチームづくりの過程であった。九州選抜の基本的なスケジュールは表 1 に示したとおりである。

表1 平成21年度九州選抜スケジュール

選手選考期間	
春季リーグ戦	4月25日～5月17日
一次選考合宿	6月6日～7日
西日本大学選手権	6月25日～28日
チームづくり期間	
大会直前合宿	8月23日～27日
5学連対抗戦	8月28日～30日

西日本大学バレーボール5学連男女選抜対抗戦(以下:5学連)とは、平成10年度に九州大学バレーボール連盟と関西大学バレーボール連盟が、全日本大学バレーボール女子選手権大会(以下:全日本インカレ)で優勝するチームのほとんどが関東大学バレーボール連盟所属であるという現状に対して「西日本地区から優勝できるチームを育てる」ことを目標として、両大学連盟のレベルを上げるために女子の選抜チームによる対抗戦として発足し、その後、平成12年度より西日本地区の5つの学連(東海・関西・中国・四国・九州)による男女の選抜対抗戦として発展したものである。

平成21年度の九州選抜は、M監督、Yコーチ、Sトレーナーに選手15名、マネージャー1名の計19名。M監督は、平成19年度から3年連続の九州選抜の監督であった。Yコーチは、過去10年間すべての5学連に、監督、コーチ、アシスタントコーチとして指導を行っており、M監督の下でのコーチは、女性であるSトレーナーとともに前年に続き2年連続であった。

M監督が指揮を執った過去2年間の5学連の成績は、ともに予選リーグ戦、決勝トーナメント戦を全勝で優勝していた。特に、前年の5学連の九州選抜においてM監督は、優勝するというよりは、他のチームには「絶対に負けない」という自信を持って大会に臨み、予選グループ戦、決勝トーナメント戦ともに失セットゼロの完全優勝であった。また、九州選抜の第9回大会までの5学連の成績は優勝7回、準優勝2回で平成20年度の大会まで6連覇していた。

なお、本研究については、5学連の大会終了後に企画されたものであり、チームづくりの期間中に研究を意図とした指導は全く行っていない。

## 2 方法

本研究では、まず平成21年度の5学連における九州選抜の選手選考の過程と結果、チームの状況と課題について記述を行う。次に、大会に向けたチームづくりの基本的な方針、キャプテン決定、合宿中のチームづくりとスターティングメンバー(以下:スタメン)の決定について記述を行う。最後に、大会中のチームづくりについて記述を行い、その内容や優勝の要因等について検討を行う。なおこれらの記述、検討を行う際には、M監督が合宿、大会期間中に残っていたメモとマネージャーが提出した練習内容の記録と試合に関するデータを参考とした。

## III チームづくりの実際

### 1 選手選考とチームの課題について

まず、平成21年度の九州選抜の選手選考の過程とその結果、そして、チームの状況やチームとして考えられた課題について記述を行う。

(1) 選手選考について

平成 21 年度の九州選抜は、まず、九州大学バレーボール連盟女子強化委員によって M 監督, Y コーチというスタッフが決定され、スタッフを中心として 4 月 25 日から 5 月 17 日にかけて開催された九州大学バレーボール女子春季リーグ戦(以下:春季リーグ戦)を対象として、以下に示す項目を基準として一次候補選手の選考を行った。その中で、特に重視したことはセッターに誰を選ぶのかということ、そして、チームの攻撃と守備それぞれの中心になれる可能性があるのは誰なのかということであった。

- ① 過去の選抜チームなどでの実績があり、今年度の九州選抜の主力となることが有力であり、最終メンバーとして選出されることがほぼ決定している選手。
- ② 九州選抜の中でどのようなプレーができるのかを合宿で実際に見た上で、最終メンバーとするかどうかを判断したい選手。
- ③ 平成 21 年度の九州選抜の最終メンバー入りは難しいかもしれないが、将来性があると認められる下級生の選手。

そして、選考の結果、平成 21 年度の九州選抜一次候補選手として 31 名(4 年生 9 名, 3 年生 11 名, 2 年生 5 名, 1 年生 6 名)が選出され、春季リーグ戦終了後の 6 月 6 日~7 日に一次選考合宿を行った。その合宿は、4 年生の 5 名の選手が教育実習のため、その他 4 名の選手がケガや体調不良により不参加となり、実際は 22 名の選手でゲームを中心として行った。その後、一次選考合宿の結果と合宿に参加できなかった選手、春季リーグ戦にケガ等で出場できなかったが過去の九州選抜に選ばれるなどの実績のある選手等を考慮して、6 月下旬に行われた西日本大学バレーボール女子選手権大会(以下:西日本インカレ)において最終選考を行い、平成 21 年度の九州選抜の選手 15 名を決定した。

(2) 九州選抜のメンバーについて

平成 21 年度 5 学連の九州選抜の選手は表 2 に示したとおりである。

表 2 平成 21 年度九州選抜メンバー

選手	所属大学	学年	ポジション	身長	過去の九州選抜	その他の選抜
A	NK	4	ライト	170	3年	
B	FU	4	センター	177	2, 3年	1, 2, 3年東西, 4年ユニバ
C	FU	4	レフト	167	2, 3年	3年東西
D	KT	4	センター	180	1, 2, 3年	1, 2, 3年東西, 4年ユニバ
E	KT	4	リベロ	154	2, 3年	3年東西
F	FK	4	レフト	170	3年	3年東西
G	KK	3	センター	173		
H	KT	3	レフト	172	1, 2年	1, 2年東西
I	FU	3	ライト	172		
J	NK	3	リベロ	153		
K	FU	3	セッター	167		
L	KT	3	セッター	164		
M	NK	2	センター	177	1年	
N	FK	2	レフト	170		
O	NK	1	レフト	176		

※ 東西：全日本バレーボール男女東西対抗戦西軍代表

※ ユニバ：ユニバーシアード日本代表

チーム全体で考えると、3, 4 年生が非常に多く、その中で特に 4 年生が過去の九州選抜を経験して

いるだけでなく、ユニバーシアード日本代表や全日本バレーボール大学選抜男女東西対抗戦の西軍代表を経験しており、平成 21 年度の九州選抜は 4 年生を中心としたチームになると考えられた。

### (3) チームの状況や課題について

平成 21 年度の九州選抜は、表 1 に示したように 5 日間の直前合宿を行い、大会に入るというスケジュールであった。チームとしての目標は、これまでの九州選抜の成績から考えると、当然のことながら、限られた短い時間の中でチームをつくり優勝することであった。

例年のことであるが、九州選抜の最大の課題は、短期間でメンバーの個性や特徴を把握し「5 学連優勝」という目標に向けて、チームとしてまとめ上げることにある。眞鍋(2012, p.82)は「全日本の選手を招集すると、毎回僕は 1 週間かけて全員と個人面談を行います。」と述べているが、九州選抜は合宿から大会が終わるまでが実質 1 週間ということを考えれば、そのようなことは不可能である。とにかく、限られた短い時間の中でいかにチームとしてまとめ上げるかということが優勝するために非常に重要であった。しかし、選手には過去に経験があり選抜チームに慣れている選手と、初めて選出された選手がいるということ。さらに、それぞれの選手の目標も「選抜でレギュラーになり優勝することが目標の選手」「少しでも試合に出たい程度に思っている選手」「選ばれたことで満足している選手」といったように異なっているのが、選考合宿における選手の取り組み方からも明らかなことがチームの現状であった。北森(2008, p.136)は、「チームには、どのようなことをするにせよ、そのチームとしての目標と、メンバーそれぞれがそのために目指したいと思っている、個人個人の目標とがあります。『個人の目標』は、もちろん千差万別です。そのほうが自然、といえるでしょう。ただし、それらの目標を目指すそれぞれの力が、『チームの目標』へと向かって『自然に』合わさっていくことは、めったにありません。」と述べている。このことに関連して考えると、九州選抜においてはそれぞれが考えている個人の目標から、どのようにしてチームの目標へ向くようにするかが 5 学連で優勝するための重要な課題と考えられた。また、全員がそれぞれのチームでは主力の選手を短期間で見極めて、九州選抜では主役と脇役に振り分けることの難しさという課題も存在していた。

そして、平成 21 年度の九州選抜の最大の課題は、セッターを誰にするかであった。M 監督が指揮を執って優勝した前年までの 2 大会の九州選抜は同じセッターがスタメンとして出場しており、実質その選手が中心と言えるチームでもあった。その選手が卒業した平成 21 年度は、一次選考の際にも 5 名をセッターの候補とするなど、M 監督が非常に悩んだ上での 2 名の選出であった。その両選手は、ともに 3 年生ではあるが大学生としては初めての選抜チームであり、「バレーボールの中心はセッター」と考えている M 監督としては、目標である優勝に対して大きな不安を感じていた。こういったことから、平成 21 年度の九州選抜は、卒業したセッターの穴が埋まるかどうかを考えると、5 学連優勝、そして 7 連覇は非常に厳しいと考えざるを得ない状況であった。

## 2 大会に向けたチームづくりについて

実質的な平成 21 年度の九州選抜のチームづくりの期間は、表 1 に示したとおり大会直前のわずか 5 日間の合宿のみであった。ここでは、5 学連の大会に向けたチームづくりの基本的な方針とキャプテンの決定、合宿におけるチームづくりの過程、そして、スターティングメンバーの決定についての記述を行

う。

(1) チームづくりの基本方針

九州選抜の最大の目標は5学連で優勝することにあるが、M監督は5学連で優勝するだけでなく、九州選抜の経験が一人ひとりの選手のその後の成長のきっかけや人間的成長の足がかりになることなどの教育的な配慮もしながらチームづくりをして行きたいと考えていた。そして、九州選抜のチームづくりに対しては基本的に「優勝するためには限られた時間の中でどのようにすれば、選手がチームとしてまとまり、その中でそれぞれが持っている力を発揮することができるかが重要であり、そのためには、選手自身が自主的、積極的にチームづくりに参加することが必要である。」と考えていた。これは、M監督が「選抜チームとはいえ大学生のスポーツ活動であり、最終的には勝つことをよりも、バレーボールを通して成長することの方が重要である。そのためには、言われたことしかできない、いわゆる“指示待ち人間”的な取り組みではなく、自ら考え、工夫して練習を行う姿勢が必要である。」と考えてのことであった。

一般的に選抜チームのチームづくりの場合、所属の異なる選手を一つのチームとしてまとめて行く過程においては、監督が考えるフォーメーションや方法という「型」に選手を当てはめて行くということを基本的な方針とする場合が多いと言え、特に期間の短いチームの場合はその傾向が強いと考えられる。しかし、これに対してM監督は、基本的なフォーメーションのみは決めるが、それ以外のいわゆる“つなぎのプレー”や“カバーリングのシステム”などのチームとしての約束事は選手同士で話し合ったりやりやすい方法を選択させ、問題があると感じるところは修正していく方針を取ることとした。その理由としては、まず、選手にとってはそれぞれの所属チームのやり方があるため、選手にM監督自身のやり方をすべて理解してもらうためには時間が足りないということがあった。そして、細かい約束事を自分たちで決めて行く過程における選手同士のコミュニケーションが、選手の自主的なチームづくりへの参加につながっていくのではないかとM監督の狙いがあった。これは、選手同士が活発にコミュニケーションをとることによって九州選抜の時間的課題を解決させるための一つの考え方であり、このM監督の方針については、異なる監督の下での選抜チームのコーチとしての経験が豊富なYコーチは「M監督のやり方は、他の監督とは違っていた」と指摘していた。

宗内(2007, p.189)は「選抜チームにフォーメーションプレーなどの技術指導をする場合、選手個人も、自分たちのそうした技術に対する考え方や、それに伴う練習を積み重ねている関係(習慣化)から、それらを指導者の一方的な考え方にはめ込んで指導しても、一樣にその考えに沿う技術をマスターさせるためには時間がかかりすぎる。」と指摘している。また、古川(2004)は「時限を持ったチームにあっては、特に初対面のメンバーが寄り集まっている場合ほどそうですが、リーダーとメンバーの間で、またメンバー相互間で、心理的なラポール(rapport うちとけ合い)を早期に醸成するように努めます。」と述べており、そのためにはお互いのコミュニケーションが重要と考えられる。これらのことから考えると、M監督の基本的な方針は、チームづくりの一つの方法としては支持されるものと思われる。

また、M監督の九州選抜での練習量は、過去の九州選抜の監督と比較して少ないと思われるが、これは、選手の所属チームによって練習量が異なることからの判断であった。しかし、チームの全体練習後には必ず自主練習やトレーニングの時間を確保し、その内容は各自に任せて大会に向けたコンディ

ションづくりについては選手自身に責任を持たせ、これも積極的なチームづくりへの参加へつなげたいと考えていた。

また、M 監督は、九州選抜が初めての選手にはその経験を大切にさせ、試合の出場機会が少なかった選手に対しては大会終了後にフォローすることなどの対応も忘れないようにしたいと考えていた。

## (2) キャプテンの決定

多くのチームから選手が集まる選抜チームの場合、キャプテンを誰にするかは非常に重要な問題である。

平成 21 年度の九州選抜のキャプテンの候補は、表 2 に示した中で A 選手、C 選手、D 選手の 3 名であった。その 3 名は、それぞれが所属大学ではキャプテンを任されており、その中で、一般的に考えると最も有力なのはその年に開催されたユニバーシアード日本代表チームにも選出され、所属する KT 大学も平成 21 年度の春季リーグ戦、西日本インカレで優勝している D 選手であった。しかし、M 監督は独断で、自らも所属する NK 大学の A 選手をキャプテンとして指名した。この理由は、九州選抜は短期的なチームであるため、監督からチームへの意思伝達がよりスムーズに行われることが重要であり、そのためには最も自分の考え方を理解している A 選手をキャプテンにしたいということであった。ただ、M 監督には、キャプテンに指名されなかったことによる D 選手のモチベーションの低下など、チームに対する影響に関しては不安があったことも事実である。

## (3) 合宿におけるチームづくりについて

合宿は、まず M 監督より「九州選抜の選手として、28 日からの大会の 3 日間に自分の最高の力を発揮できるようにすること。そのための時間は 5 日間と限られているが、練習量、トレーニング量が足りない場合は自主練習の時間を毎日必ず設定するので各自で補うこと。各チームの代表としての自覚と誇りを持って 5 学連で優勝できるように、言われないとやらないのではなく、自ら積極的に取り組んで欲しい。」という話があってスタートした。

M 監督は、当然のことではあるが、合宿前から図 1 に示したようなスタメンの構想を考えていた。九州選抜では、セッター(S)を挟む第 1 レフト(L1)と第 1 センター(M1)をそのポジションの中心選手としているが、その中で、チームの最大の課題であるセッターをどちらにするのか、第 2 レフト(以下:L2)のポジションを誰にするのか、ピンチサーバーは二人と考えていたが一人は J 選手でもう一人を誰にするのか、各ポジションの控え選手の順番をどうするのかといったことがチームの課題であった。

R A選手④ I選手③	M2 B選手④	L1 H選手③
L2 F選手④ C選手④ N選手②	M1 D選手④	S L選手③ K選手③
LI E選手		

○数字は学年

S: セッター R: ライト L1: 第1レフト  
L2: 第2レフト M1: 第1センター M2: 第2センター LI: リベロ

図1 平成21年度九州選抜のスタメン構想

合宿の初日は、メンバーの顔合わせとサインやコンビネーションの確認等の簡単な練習で終わったが、2日目の練習からは、そういったチームの課題をどう解決していくかに対して試行錯誤しながら行われた。このような状況の中で、M監督は合宿2日目に4年生のみ集めて「今年の九州選抜は4年生のチームであるという自覚を持つこと。3年生以下は初めての選抜メンバーが多く、特にその中で2名のセッターは3年生であるが、そのセッターを4年生がどう引っ張るかが優勝するためには必要である。」と話している。この話の狙いは、5学連は4年生が中心のチームで勝負することの確認もあるが、それよりも今年のチームはセッターが課題であることを監督と同様に4年生には認識して練習に取り組んで欲しいということにあった。また、合宿3日目には3年生のみを集めて「今年の九州選抜は、経験のある4年生が中心のチームであるが、4年生の後ろをついて行っているだけではダメだ。優勝するためには3年生の存在や活躍が重要である。セッターの二人はともに九州選抜が初めてのなので、経験のあるH選手はセッターをカバーして欲しい。」と話している。この話は、実際は九州選抜の最大の課題であった3年生の2名のセッターの選手に対してのものであった。しかし、合宿3日目のこの時点では、チームの最大の課題であるセッターについては、「併用」か「固定」か、固定する場合はどちらをスタメンで起用するかは、練習をすればするほど迷ってしまうという状況であった。

そして、残り2日となった合宿4日目のこの日は午後から実業団Fとの練習ゲームが組まれていたが、午前中の練習ではチームとしてのまとまりが全く感じられない雰囲気であった。その原因としては、それまでの練習はいろいろとメンバーの組み合わせなどを代えながらのものであり、選手がチームにおける自分の役割を明確にできずに、全員の意識がチームの目標である「5学連優勝」に向いていなかったのではということが考えられた。この場面については、代表チームとしての責任や大会を直前に控えたチームということを考えると、本来であれば、指導者がこの練習の雰囲気に対して無理にでもチームの目標に向かわせるための厳しい指導を行う必要があったかもしれないが、M監督は怒ることも厳しい指導もしなかった。こういった状況の中で、実業団Fとの練習ゲームが行われた。その結果は、セットカウント5-0であったが、勝ったことよりも、この練習ゲームで一人ひとりの選手の意識が初めて対戦相手へと向いたことによって雰囲気が一気に変わり、チームとしての一体感が生まれたことが何よりの収穫で

あった。また、この練習ゲームによってそれぞれの選手の役割が明確になり、個人の目標がチームの目標へと切り替わるきっかけになったと考えられる。M 監督のこの日のメモには、「メンバーを選んだ責任は私にあるので、意地でも怒ることはしない。負けたら監督の責任。」「雰囲気が変わったのは、これまで選手同士でいろいろと話をしてきたからだろう。これで、ある程度チームとして戦えるメドが立った。」といった言葉が残されていた。

#### (4) 正セッターとスターティングメンバーの決定について

M 監督は、合宿に入って 5 学連をどのようなメンバーを中心として戦うのかに対して練習を行っていたが、その中で、チームとしての最大の課題であるセッターについては、2 人のセッターを併用した上で競わせてチームを完成させて行くべきか、最初からどちらかのセッターに固定して戦う中でチームを完成させて行くべきか決断できずにいた。一般的には、「セッターは司令塔です。野球でいうキャッチャー、オーケストラでは指揮者にあたります。」(工藤, 2011)とされていることから、M 監督も、チームの中心となる正セッターはできれば固定したいと考えていた。そして当然のことながら、限られた短い時間の中でセッターを併用しながらチームづくりを行うことは非常に難しいと考えられる。しかし、では K 選手、L 選手のどちらを正セッターにするかと考えると、どちらにも任せ切れないというのが現実であった。

このような状況の中で、M 監督は実業団 F との練習ゲーム行った日に、その結果等を参考として Y コーチと相談した上で正セッターを K 選手とすることに決定し、直接 K 選手に伝えた。ただ、それは K 選手の方が L 選手より「ブロックが高い」「サーブがいい」というセッターとしての能力とはあまり関係のない理由が大きく、非常に苦しい決定であったことは事実である。

その他のメンバーに関しては、多くの候補選手がいた L2 は、C 選手をスタメンで行くことを決定した。それは、K 選手を正セッターで起用するということに関連しており、C 選手は K 選手と同じ大学のキャプテンであり、コートの中で K 選手をフォローしてくれることを期待しての決定でもあった。そして、昨年の九州選抜で活躍し、チームのムードメーカーになれる F 選手を今年は控えとすることとした。N 選手については、サーブレシーブ力も含めて総合的に考えれば L2 のスタメンになることが期待されていたが、練習での取り組みや、選抜チームの経験等を考えると任せることはできないという結論に達した。また、ピンチサーバーとしては J 選手のほかに I 選手を起用すること、センターの控えは M 選手、G 選手の順とすることなどを基本的なメンバー構成として決定した。

### 3 大会期間中のチームづくりと勝因について

#### (1) 他チームの特徴と大会の展望について

これまでの 5 学連から考えると、各学連の選抜チームは 2 つのタイプに分けられる。それは、多くのチームから能力の高い選手を選んでチームを組む「選抜型」と、一つの大学を中心としてやや力が劣ると考えられるポジションに他大学の選手を 1~2 名加えてチームを組む「単独チーム中心型」である。そして、平成 21 年度の 5 学連では、東海学連と関西学連が「選抜型」、中国学連と四国学連が「単独チーム中心型」と予想された。選抜チームに関しては一般的に、多くのチームから能力の高い選手を選抜する「選抜型」が強いと考えられるが、実際には「単独チーム中心型」の方が強い場合がある。かつて自身が監督を務めるチームの選手を中心とした「単独チーム中心型」の女子の日本代表を率いて世界 3

冠を達成した山田重雄監督は「全日本の期間だけ選手を集めてチームをつくるより、1年365日間続けて強化しているチームの方が強いのは明らかだ。」と話をしていた。この言葉から考えると、5学連のような短期的なチームの場合はなおさら「単独チーム中心型」が強いと思われる。

こういったことから考えると、「選抜型」の九州選抜としては、初日に対戦する四国選抜と中国選抜には警戒が必要であるが、特に、平成21年度の西日本インカレで準優勝した大学のほぼ単独チームと予想される中国学連が既にチームとして完成されており、最も厳しい試合になることが予想された。

一方で、「選抜型」のチームとの対戦に関しては、辞退する選手が出るなど最強のメンバーではないという情報もある関西選抜戦よりも、過去の5学連で九州選抜に次ぐ成績を収めており、前年の全日本インカレベスト8のチームのセッターを中心とした攻守のバランスいいチームと予想される東海選抜戦の方が重要であると考えられた。

このような状況の中で、九州選抜としては予選リーグ戦をできれば1位で通過したいが、試合を通して力をつけてチームを完成させた上で決勝トーナメントに臨み、最終的には優勝することを目標として大会を迎えることとした。

(2) 大会期間中のチームづくりと試合結果について

M監督は、九州選抜のミーティングでは選手に対して重要なことのみを簡潔に話すようにし、その先の選手同士のコミュニケーションを大事にしたいと考えていた。大会期間中も、対戦相手に関する相手チームの情報は伝えるが、その後は提出される選手のミーティングの結果に対して、必要と考えればそれに付け加える方針としていた。

5学連の試合結果は表3に示した。大会初日は、7名のスタメンのうち1名のアタッカーを除く6名が同一大学所属の四国選抜とリベロを除くスタメンの6名が西日本インカレで準優勝した同一大学所属の中国選抜という、予想通りの「単独チーム中心型」のチームとの対戦であった。その中で、中国選抜との試合は前述の大会前の予想が的中した形となり、第1セットはほぼ一方的な展開で落としてしまった。しかし、九州選抜は第2、第3セットを連取して逆転で勝利し、この試合を通して「予選リーグ戦では、試合を通して力を付けてチームとしての完成を目指す。」という方向へチームが行くことができればとM監督は感じていた。

表3 試合結果

予選グループ戦					
九州選抜	2	(25-15	25-18)	0	四国選抜
九州選抜	2	(18-25	25-18	15-11)	1 中国選抜
九州選抜	2	(22-25	25-19	15-12)	1 関西選抜
九州選抜	2	(25-10	18-25	15-13)	1 東海選抜
					4勝0敗 1位
決勝トーナメント					
九州選抜	2	(27-25	25-17)	0	関西選抜
九州選抜	2	(25-16	25-14)	0	中国選抜
					最終結果 優勝

大会初日を終えて、M監督が特に感じたことは、セッターのK選手がセンターを使えていない上に、

コンビネーションも合っていないことであった。そこで、M 監督は、K 選手の所属チームの監督から話を聞いた上で Y コーチと話し合い、センターのポジションを入れ替えて、B 選手を第 1 センター(以下:M1)、D 選手を第 2 センター(以下:M2)へと変更することを決定した。この決定は、B 選手と K 選手は同じ大学の選手であり、B 選手はそのチームでは M1 に入っているため、それと同じ配置にして普段からコンビネーションを組んでいる関係に戻すことによって、K 選手の負担や不安を軽減させるためのものであった。しかし、一方で D 選手にとっては M1 から M2 への降格とも考えられ、九州選抜のキャプテンを任せられなかった上でのこの変更によるモチベーションの低下が心配された。そこで、M 監督は、D 選手に対して「この変更は、セッターの負担や不安を軽減するための措置である。」ということを正直に話して、2 日目の試合もチームの中心として引っ張って欲しいと伝えた。

大会 2 日目は、最初の関西選抜との試合で第 1 セットを勝った場合は、第 2 セットはセッターを L 選手に代える予定でいたが、第 1 セットを接戦の末に落としてしまった。その結果、第 2 セットも K 選手をそのまま起用し、その後の 2 セットを連取して勝つことはできたが、この試合は、特に第 1 セットの K 選手のトスが非常に悪く、途中で L 選手に代えられても仕方がないような内容であった。

予選リーグ最終戦は東海選抜との対戦であったが、九州選抜のここまでの試合内容から考えると翌日の準決勝、決勝のためには何としても 2-0 で勝利しておきたい試合であった。その試合の九州選抜はスタートから今大会で最も好調と感ぜられるゲーム展開で第 1 セットを圧勝したにもかかわらず第 2 セットを落としてしまい、何とか最終セットの接戦を勝利して予選リーグ戦を 1 位で通過した。

ここまでの九州選抜は、4 戦中 3 戦がフルセットの勝利の上、セッターのトスも安定せずに短期的な選抜チームとして不安定な戦いが続いており、決勝トーナメント戦に対して不安を残す状況であった。

決勝トーナメント戦を翌日に控えて、Y コーチは関西選抜戦を振り返って M 監督に「あれだけトスが悪かった K 選手をよく代えずに最後まで我慢しましたね。」と指摘をしている。確かに普通に考えれば、誰が監督でもセッターを代える場面であったかもしれない。しかし、M 監督は、大会前に K 選手に「正セッターとしてスタメンで行く」と決断して言い切った以上、負けたという結果で交代させるべきではないと考えた。そしてこれは、勝って交代であればいいが、その試合でトスが悪かったことは K 選手自身が最も感じており、負けて代えればそれは K 選手の責任だと示すことになってしまい、それでは本人も抱えていたと推察される「不安」をさらに大きくしてしまうであろうという M 監督の判断によるものであった。

その日 M 監督は K 選手を呼んで「関西選抜戦で代えなかったのは、K 選手と心中するという意思表示である。出場機会の少ない L 選手の分まで頑張ってもらいたい。」と伝えた。これは「時間は限られていたが、やれるだけのことはやってきたので、どのような結果になろうと監督の責任として受け入れる。」という M 監督の決断でもあった。また、M 監督はこの日の夜、4 年生のみを集めて「今年の九州選抜は、4 年生のチームである、それで負けたなら後悔はない。」と合宿初日と同様な話をした。その中で、A 選手、D 選手はともに所属チームではキャプテンであり中心選手であったが、九州選抜ではセッターのトスと合っていないというストレスは見取れていたので「チームが勝つため、ということを考えて欲しい。セッターを引っ張ることを考えて欲しい。」と個別に話をして、決勝トーナメントを迎えた。

大会最終日の準決勝の対戦相手は、前日フルセットの末に勝利した関西選抜であった。この日の九州選抜は、前日までと比較するとチームの雰囲気も非常にいいと感ぜられ、心配されていた D 選手もこの試合ではチームのために一生懸命声を出して頑張っていた。しかし、その D 選手が第 1 セットの途中

で足関節を捻挫し、チームを離れることになってしまった。試合は、ケガをしたD選手の代わりにM選手を起用し、その第1セットこそ接戦となったがセットカウント2-0で勝利し、九州選抜は決勝進出を決めた。

決勝は、予選グループ戦の中で最もまとまりがあると感じられた中国選抜との対戦であった。この試合でK選手は、準決勝まではアタッカーの4人が4年生であり、それに対してミスをしないように気を使いながらトスを上げている感じもあったが、D選手のケガによって入った2年生のM選手がコートに入ったことで、精神的な負担も軽くなったように非常にいい動きを見せていた。そのM選手をK選手がうまくリードして、決勝でのスパイク打数7本のうち決定6本の決定率85.7%の活躍を引き出してセットカウント2-0で圧勝し、九州選抜は7連覇を達成した。この結果は、大会前からチームとしてほぼ完成しており予選リーグ戦では苦戦した中国選抜が試合を通して伸びる要素が少なかったことに対して、D選手を欠きながらも圧勝したことは九州選抜のチームとしての成長を示すものであったと考えられる。

### (3) 5学連優勝の要因について

九州選抜は、厳しいと考えられていた状況の中で平成21年度の5学連において予選グループ戦、決勝トーナメント戦を全勝で優勝し、7連覇を達成した。この優勝は、試合を通して力をつけることによってチームが一つにまとまり、勝てるチームへと成長した結果であると考えられる。

その勝因の一つとしては、まず、M監督のチームづくりを支えた九州選抜のスタッフの存在が挙げられる。M監督は、九州選抜の指揮を執った3年間の5学連の中で平成21年度が最も不安を感じていたが、特にYコーチとのコミュニケーションがメンバーの決定や状況に応じた選手の入れ換えなどの決断を支え、柔軟なチームづくりを可能にしたことは事実である。また、女性であるSトレーナーは選手との年齢も比較的近いことから、単に選手の治療を行うだけでなく、選手との良好なコミュニケーションを心がけ、その中で必要に応じてM監督に報告し、それが監督の判断材料になるなどチームの運営に大きく貢献していた。また、今回の九州選抜はマネージャーを除くスタッフは2年連続で同じメンバーであったことがそれぞれの力を発揮しやすい環境であったと考えられる。ある全日本ジュニア代表チームの監督経験のある指導者は「年度によってスタッフが代わると、スタッフの役割調整に労力を使えばかりいて、本来の選手の力を発揮させることができないことがあった。」と話をしていた。短期間の選抜チームのチームづくりにおいては監督の素早い判断と決断が求められるが、それを支えるスタッフが非常に重要であり、今回の九州選抜ではM監督のチームづくりに対する支えとなっていたスタッフの存在がチームを優勝へと導いたことは明らかである。

そして、M監督がチームを自分の型にはめようとせず、選手同士のコミュニケーションを重視し、選手が自主的にチームづくりへ参加する方針としたことも優勝の一つの要因と考えられる。北森(2008, p.5)は「良好なコミュニケーションは、その人が本来持つさまざまな力に火をつけるともに、人と人との創造的で、あたたかな結びつきを生みます。そのようなコミュニケーションによって、組織、チームの持つ創造力や目標達成力、成長力などの力も開発され、チームビルディングが進んでいくのです。」として、チームづくりにおけるコミュニケーションの重要性を指摘している。また、眞鍋(2012, p.24)は「監督が選手に指示を出すだけの、一方通行のミーティングからは何も生まれません。このようなミーティングでは、選手は指示にただ『はい』と頷くだけのイエスマンになりがちです。イエスマンは自ら考えようとはしませ

ん。そんな選手が目立つチームは、成長しませんし、自ら強くなることを放棄しているようなものです。」と述べている。

これらのことから考えると、平成21年度の九州選抜は、M監督の「基本的なこと以外は選手同士の話し合いの上で選手のやりやすさを優先させ、任せられる面は選手に任せたい。」という方針に対して、選手が自ら積極的にコミュニケーションを取り、チームづくりに参加することによって勝てるチームへと成長したことが、5学連優勝という結果につながったのではないかと考えられる。

こういった中で、特に、九州選抜の最大の課題であった正セッターについて、M監督が2名を併用せず、大会前からK選手に固定することを決断して最後まで戦い抜いたことも大きな勝因としてあげられよう。眞鍋(2012, p.40)は「スパイカーを生かすも殺すもセッター次第」と指摘しており、セッターはバレーボールにおいては司令塔と言われる非常に重要なポジションである。その司令塔であるセッターを短期的なチームにも関わらず併用していると、アタッカーとのコンビネーションだけでなく、チーム全体に精神的な迷いを生んでしまう可能性も考えられる。九州選抜は前年まで6連覇しているチームであり、M監督が不安を感じていた以上に、初めて九州選抜に選ばれたセッターの二人の方が不安であったと推察できる。そういう状況の中で、セッターを併用して競わせていたのであれば、両選手ともに「ミスしたら代えられる」と感じながらの試合になっていたかもしれない。特に、予選2日目の関西選抜戦の第1セットを負けた時点でセッターをL選手に代えてしまえば、その負けはK選手の責任となり、K選手は最後まで不安を持ったまま試合を続けていた可能性がある。短期間の選抜チームということを考えれば、M監督とK選手の間には信頼関係ができていたとは言えないのは仕方がない。だからこそ、負けて代えるのではなく、負けたから任せるという起用をM監督が決断したことに対して、K選手が頑張ったことが、厳しいと考えられていた5学連の優勝につながったと考えられる。

そして、A選手をキャプテンとしたことも勝因の一つと考えられる。決勝戦の第2セット、大きくリードした場面ではあったが、セッターのK選手が無理な態勢から何回も続けてA選手にトスを上げ、最後のスパイクをA選手が決めて優勝を決めた場面がある。M監督が試合終了後にこの場面について聞いたところ、K選手はその理由を「A選手が私に一番気を遣ってくれ、声をかけて励まし助けてくれたので、最後の1点はA選手で取って優勝したかった。」と答えた。A選手はM監督の所属チームでもキャプテンを任されているが、M監督は九州選抜のキャプテンに指名した際に「監督の考え方を最も理解している選手である」という理由は何も話していない。A選手自身は、選抜チームの経験が他の4年生と比較して少なくD選手が九州選抜でもキャプテンになるだろうと考えていたようであり、5学連終了後にM監督に対して「D選手の存在を気にしないことはなかったし、キャプテンはやりにくかった。」と言っている。こういった状況であったが、M監督の「今年の九州選抜の課題はセッターである」という考えや不安をA選手が理解した上で、特にK選手に声をかけていたとすれば、キャプテンの決定についても優勝の勝因の一つであったと言える。宗内(2007, p.221)は、選抜チームで勝つための考え方の一つとして「自分の育てた選手を核としたチーム作りをする」ということを指摘している。本研究における九州選抜のチームづくりの結果は、このことを支持するものと考えられた。

その一方で、キャプテンには指名されなかったが、D選手の存在が5学連で優勝するために非常に重要であったと考えられる。D選手自身は、九州選抜のキャプテンとして、センタープレーヤーの中心として活躍するという意気込みでチームに参加して来たであろう。しかし、キャプテンを任されることもなく、

また、セッターの問題によってではあるが M1 から M2 への降格と考えられる配置転換をされた中でも、D 選手はチームのために一生懸命声を出して頑張っていた。そして、D 選手のケガによって、選手一人一人が「D 選手の分も自分がやる」という気持で決勝戦に向けてチームが強くとまとまったというのは事実である。選手のケガという不測の事態でチームがどのように動くかは、チームに内在する目標達成に対する動機によるものが大きいと思われ、それは試合の結果を大きく左右する重要な要因になると推察される。D 選手がケガをしたことで、チームがまとまったということは、それまでの D 選手の姿勢を選手全員が見ており、決勝戦での圧勝は D 選手のためにも勝ちたいという気持ちの表れであったと推測できる。このように考えると、D 選手は、九州選抜の優勝のカギを握る重要な選手であったと思われる。

#### IV 総合的考察

ここまで平成 21 年度の 5 学連における九州選抜のチームづくりについて検討を行ってきたが、その優勝は、チームが成長し一つにまとまった結果であると考えられた。ただ、九州選抜は短期間の選抜チームということから、チームの中ですべての選手が持っている力を発揮できたかと考えると、そうとは言い切れないのは事実であった。そこに限られた短い時間の中でのチームづくりの難しさも感じられた。

その中で特に感じられたのは、選抜のチームづくりの場合は、個人の目標が優先されてしまう場合もあり、常に一緒にいるメンバーが次の大会に向けて目標を立てることよりも難しいということであった。今回は、たまたま合宿中の練習ゲームが個人の目標からチームの目標に切り替わるきっかけとなったが、指導者は、個人の目標をいかにしてチームの目標へ切り替えて一つにまとめるかが重要であるということが感じられた。チームのまとまりに関して北森(2008, p.159)は「ただ単に課題を達成することを考えているだけで、チームは『まとまって』いけるのでしょうか。チームが課題を成し遂げるには、一人ひとりが力を『出す』だけでなく、各自の力を『合わせる』ことを考えなければなりません。」と述べている。このことについては短期間のチームでは指導者がより強く意識する必要があり、それをどう考えてチームづくりをしていくかが重要であると考えられた。そして、チームが一つの目標に向かうきっかけとなった練習ゲームについては、それまでに行ってきた練習の成果や実力を確認するだけでなく、選手一人ひとりの役割やチームの課題も明確にできる可能性があるため、選抜チームだけでなく単独チームにとってもチームづくりにおける非常に重要な手段であると推察された。

また、本研究を通してチームづくりの一つの方法として考えられたのが、指導者が自分の「型にはめられない」ということであった。選抜チームであり時間が足りないことから、指導者の考えている型にはめて行くだけのチームづくりを行うと、選手はそれだけをやればよいと感じてしまうこともあり、結果として本来選手が持っている力を発揮できない可能性も考えられる。圧倒的な力を持った選手が集まっているのであれば、決まったシステムに選手を並べて試合をするだけで勝てるのかもしれない。しかし、今回のチームは、司令塔であるセッターに不安があるという弱点を抱えたチームと考え、選手が積極的な姿勢でチームづくりに参加する必要がある、単に型にはめるだけでは優勝という結果は得られなかったのではないかと感じられる。平尾(2006)は、ラグビー日本代表という選抜チームの監督を務めていたときの信念として『型』をつくって選手をそこに当てはめるのではなく、個々の技術と判断でゲームを組み立てていくことこそが真の強化と呼ぶべきもの』と述べている。九州選抜のチームづくりを通して、型にはめられないが監督を中心として、スタッフ、選手が同じ意識を持ってチームとしての型をつくっていくことも、

チームが勝つためには重要なのではないかと感じられ、今回の九州選抜はそれができたことで優勝という結果が得られたと推察された。

そして、そういったチームづくりを支えたのが指導者と選手、選手同士のコミュニケーションであったと言え、短期間の選抜チームにおけるコミュニケーションの重要性が強く感じられた。コミュニケーションについては「実際にチームを運営するときには、チーム内のコミュニケーションをうまくはかることが重要になる。多様な個性のメンバーを選んだときはなおさらだ。チームとしてまとまるには、リーダーだけでなく、メンバー一人ひとりのコミュニケーション能力が求められる。」(小林, 2007)とされているが、九州選抜で M 監督が選手とのコミュニケーションで特に重視したことは、「短く、簡潔に、分かりやすい言葉を選ぶ」ということであった。チームづくりの限られた時間の中で、監督が長々と話しをしてそれを選手が理解しているかどうかの確認をしている時間はなく、簡潔にわかりやすく話をして、あとは選手に任せるしかない。今大会の九州選抜の優勝は、そういった M 監督の言葉に対して選手の意識が「自分たちでチームをつくり上げる」ことに向けた結果であろう。そして、D 選手のケガという不測の事態に対してチームが強くとまとまったことも、選手同士のコミュニケーションを重視してきたチームづくりの結果と考えられる。チームが苦しいときにより強くまとまることができるかは、それまでのチームづくりの過程の中で「何をしてきたか」の結果以外には考えられず、このことはあらゆるチームに言えることであろう。ただし、このチームは 4 年生が中心であったことがそれを可能にしたとも考えられ、下級生が中心のチームに対しても同様な考え方が当てはまるとは言い切れないであろう。

最後になるが、大会終了後に試合での出場機会の少なかった選手に対して M 監督は言葉をかけている。その中で F 選手には「去年は選抜のレギュラーで活躍して優勝に大きく貢献してくれたが、去年は C 選手が今の自分と同じ悔しい思いをしていた。今回はチームとセッターの事情で出場機会が少なくして申し訳なかったが、この悔しい経験を先につなげて欲しい。」N 選手には「本来であれば最も能力が高い選手と思うが、今の取り組み方では選抜の中心選手になるのは難しい。試合に出られなかった悔しさを今後はどう生かすのが大事ではないか。」といったことを話した。秋季リーグ戦では 5 学連で出場機会の少なかった選手の多くが各チームで活躍し、特に、F 選手と N 選手の所属する FK 大学はその活躍により春季リーグ戦の 4 位から秋季リーグ戦では優勝し、KT 大学の 6 連覇を阻んでいる。これらの選手は、大会期間中に活躍の場面は少なく悔しい思いをしたであろうが、その中で何かを考え、学んだ結果としての秋季リーグ戦での活躍があったと推察できる。こういったことも、九州選抜の経験を通じた選手の成長というチームとしての成果であったと考えられる。関子(2014)は、コーチングにおける目的と行動を 2 つに分類し、その一つとして「人間としてのライフスキル、すなわち人間力の向上を目的とした育成行動である。合目的な思考や行動ができない選手、正しい哲学や倫理を持たない選手は、ある時点での競技力は高いものの、長期間に渡って高度に向上させることは不可能である。」と指摘している。指導者はどのようなチームであっても、選手の人的成長を念頭に置いたコーチングを心がけるべきであるということが九州選抜のチームづくりの中で感じられた。

## V まとめ

平成 21 年度西日本大学バレーボール 5 学連選抜男女対抗戦における九州選抜女子チームの優勝までのチームづくりの過程について検討、考察を行った結果は以下のとおりである。

- 1) 九州選抜の優勝は、チームづくりにおける指導者の方針に対して、選手が一つにまとまり勝てるチームへと成長したことによる結果であった。
- 2) 短期間の選抜チームのチームづくりには指導者の素早い判断と決断が求められるが、そのためにはそれを支えるスタッフの存在が重要である。
- 3) 短期間の選抜チームのチームづくりにおいて指導者には、個人の目標をいかにしてチームの目標へと切り替えさせるかが必要である。
- 4) 短期間の選抜チームでは、指導者が選手を自分の考える「型」にはめるのではなく、選手同士がコミュニケーションを取ることによってチームづくりに積極的に参加し、全員でチームとしての「型」をつくって行くという方法もあることが認識された。
- 5) 短期間の選抜チームで指導者が選手に話をする際には、「短く、簡潔な言葉を選ぶ」ことが必要な場合もある。

本研究で得られた結果は、短期的な選抜チームという特殊なチームの事例に関するものである。しかし、短期的なチームであろうとその中の課題を解決していくことがチーム力の向上につながるものであり、本研究の結果は今後のバレーボールのチームづくりにおける貴重な資料となるものであった。

#### 引用・参考文献

- ・ 會田宏(2014)コーチの学びに役立つ実践報告と事例研究のまとめ方 コーチング学研究, 27(2): 163-167.
- ・ 古川久敬(2004)チームマネジメント, 日本経済新聞社, p.109.
- ・ 平尾誠二(2006)人は誰もがリーダーである, PHP 研究所, p.4.
- ・ 今丸好一郎(2010)チームづくりに関する事例的研究 -本学バレーボール部(6人制)の平成19・20年度における活動報告-, 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学 紀要, 45:107-115.
- ・ 北森義明(2008)組織が活きる:チームビルディング, 東洋経済新報社, p.5,136, 159.
- ・ 小林恵智(監修)(2007)[入門]チームビルディング, PHP 研究所, p.50.
- ・ 工藤憲(2011)共汗・共涙・共生 ~子どもを育てるジュニアバレーボール指導論~, バレーボール・アンリミテッド, p.121.
- ・ 眞鍋政義(2012)女性マネジメント, 扶桑社, p.24, 40, 82.
- ・ 箕輪憲吾(2003)バレーボールのチームづくりに関する事例的研究 -ゲームにおける敗戦の内容について-, 県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要, 4:93-104.
- ・ 箕輪憲吾(2007)バレーボールのチームづくりに関する事例研究 -短期大学女子チームの失敗例について-, スポーツ運動学研究, 20:83-95.
- ・ 宗内徳行(2007)雑草チームの挑戦 ~頂点を目指すバレーボール監督の記録~, 叢文社, p.189, 221.
- ・ 中西康巳(2002)競技スポーツにおけるバレーボールのチームづくりに関する研究 -T 大学女子バレーボール部の2002年シーズンについて-, スポーツコーチング研究, 2(1).
- ・ 吉田敏明(1993)チームづくりに関する事例的研究-大学女子バレーボールチームの場合-, スポーツ運動学研究, 6:11-22.

- ・ 吉田敏明 (2005) コーチ学の経緯と展望, びわこ成蹊スポーツ大学 研究紀要, 3:7-14.
- ・ 関子浩二 (2014) コーチングモデルと体育系大学で行うべき一般コーチングの内容, コーチング学研究, 27(2):149-161.